

## 資 料

## 学校生活における児童の心理的ストレスの分析\*\*

——小学4, 5, 6年生を対象にして——

長 根 光 男\*,\*\*\*

## ANALYSIS OF PSYCHOLOGICAL STRESS IN SCHOOL LIFE

Mitsuo NAGANE

The purpose of this study was to examine the psychological stress in school life. Subjects were 119 boys and 120 girls from 4th, 5th and 6th grades of elementary school. The structure of psychological stress was investigated by means of the factor analysis, and four different factors were extracted from 20 given items. Each factor was labeled respectively as follows: F1: human relation to classmates; F2: presentation in the class; F3: school achievement, and F4: failure in the class. Significant sex differences in children's psychological stress were found: females were seen more responsive than males, whereas there was no difference in grade.

Key words: psychological stress, school adjustment, elementary school, factor analysis.

## 問 題

近年、登校拒否、校内暴力、いじめ等、学校において児童・生徒が必ずしも日々満足した生活を送っていないことが報告されている (cf. 総務庁, 1988)。このことは、一面では、児童・生徒が学校生活において、何らかの心理的ストレス (Psychological stress) を感じる人が多いことを示唆するものである (安藤, 1985)。従って、学校生活で児童・生徒がどのような心理的ストレスを受けているかを分析することは意義あることであろう。

Lazarus (1984) は心理的ストレスを刺激、認知的評価、反応の複合的反応系と定義し、対処の仕方 (coping

process) を分析している。欧米においては、この心理的ストレスの研究は、学校不適應の領域でも数多くの研究がなされている (Lorion, Cowen, & Caldwell, 1975; Forman & O'Malley, 1984)。一方、わが国においては、学校現場に視点をおいて研究された心理的ストレスに関する論文は極めて少ないことが指摘されよう。教育実践と関わりのある心理的ストレスに関係する先行研究では、例えば、浜・三根 (1980) のテスト不安に関する研究があげられる。また、井上 (1986) の児童の自尊心と失敗課題への対処との関連は、教育現場を念頭において、self-esteem の視点からストレスを分析した研究といえよう。水越ら (1980) は心身発達状況と学校教育への適應に関し、知能、性格、性別、生まれ月など12の要因について分析している。しかし、これらの研究では、児童の視点に立ったストレス尺度の構成はまだ試みられていない。

今後は、わが国の教育的風土を背景として、児童の立場に立った主観的尺度を用いた心理的ストレスの分析が必要とされよう。そうすることによって、本研究

\* 埼玉県坂戸市立北坂戸小学校 (Kitasakado Elementary School)

\*\* 本研究の概要は、日本教育心理学会第31回総会 (1989) において発表された。

\*\*\* 本論文の作成にあたり、東京外国語大学田島信元助教授より適切な御助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。

の目的である学校生活における心理的ストレスの解明が、新しい視点からできるものと思われる。

## 目 的

小学校高学年の児童が、学校生活のどのような局面において、心理的ストレスを感じることが多いのか、心理的ストレス尺度を作成し、その尺度をもとに、児童の学校でのストレス度を分析することを目的とする。

## 方 法

**原尺度の作成** 児童の立場からとらえた心理的ストレス尺度を作成するため、4年生(男子21,女子20)、5年生(男子19,女子20)、6年生(男子20,女子20)に尺度作成の原資料となる自由記述式のアンケートが各クラスごとに集団で行われた。教示は次の通りである。“これから、あなたが学校生活において、どういうことでイライラしたり、胸がドキドキしたり、あるいはあせったりするか、今までのことを思い浮かべて、思いっただけ書き出してみてください。”

上述の収集された資料から、重複項目は除かれ、また性差にかかわらず実施できる計32項目の原尺度が構成された。

**調査の実施** 被験者は埼玉県内のベッドタウン地域におけるA小学校4～6年生、計239名(原尺度作成のための被験者を含めず)であった。これは、当該学年から任意に2クラスずつ抽出したものであり、各学年ごとの

TABLE 1 The number of subjects

|       | Grade |     |     | Total |
|-------|-------|-----|-----|-------|
|       | 4th   | 5th | 6th |       |
| Boys  | 42    | 37  | 40  | 119   |
| Girls | 40    | 41  | 39  | 120   |
| Total | 82    | 78  | 79  | 239   |

内訳はTABLE 1の通りである。本尺度はクラス単位で実施され、教師が1項目ずつ朗読し、それに被験者が回答する方法が

とられた。各項目は、Harter (1981)と同様に、児童のチェックしやすさを考慮して、相互に対照をなすような対項目を提示し、例えば“授業参観や研究授業の時、あなたは緊張しますか、それともふだんの授業の時と同じですか”の質問形式をとり、自分がどちらのタイプに近いのか、またどの程度近いかを4段階で評定させた。

## 結果と考察

**尺度の分析** 各項目への反応には、ストレス度の高い方から、4～1点が与えられ、これにもとづき因子分析が行われた。因子分析では、主因子法によって因

子が抽出され、Varimax 回転が行われた。その結果、解釈可能な4因子が抽出された。各因子への負荷量の低い項目、および2つ以上に高い負荷量を示す項目を順次除外し、最終的に20項目が選び出された。それらの項目について、再度因子分析を行った結果がTABLE 2である。

TABLE 2 The results of the factor analysis of the Psychological Stress Scale

| Item                          | Factor loadings |        |        |        |
|-------------------------------|-----------------|--------|--------|--------|
|                               | I               | II     | III    | IV     |
| 15 友達が眼の前で内緒話を始めた時            | .642            | -.134  | .169   | .083   |
| 25 仲の良い友達から仲間はずれにされた時         | .641            | -.175  | .210   | .234   |
| 1 友達にからかわれたり悪口を言われた時          | .623            | -.134  | -.027  | .124   |
| 20 友達に気にしていることをいわれた時          | .585            | -.051  | .113   | .124   |
| 31 友達から言いたくないことをわざと聞かれた時      | .584            | -.255  | .116   | .125   |
| 28 友達に無視された時                  | .524            | -.128  | .350   | .196   |
| 29 授業中、急に先生に指名された時            | .225            | -.648  | .175   | .064   |
| 9 授業参観や研究授業の時                 | .171            | -.583  | .149   | .158   |
| 23 たくさんの人の前で発表する時             | .118            | -.550  | .104   | .007   |
| 24 授業中、分からない問題を当てられそうになった時    | .204            | -.549  | .195   | .129   |
| 6 国語の本読みの順番が回ってくる時            | .042            | -.548  | .149   | -.046  |
| 32 新しい単元の勉強に入る時               | .045            | -.439  | .275   | .156   |
| 26 テストの前の時                    | .131            | -.354  | .574   | -.025  |
| 14 先生がいきなりテストをやりますと言った時       | .126            | -.143  | .490   | -.014  |
| 7 テストをしていて時間がなくなってきた時         | .143            | -.147  | .464   | .212   |
| 19 終業式の日、通知表をもらう前             | .125            | -.265  | .454   | .168   |
| 2 先生にウソをついてしまった時              | .131            | -.083  | .026   | .519   |
| 3 学級のをこわした時、先生が訳をよく聞いてくれなかったら | .189            | .069   | .046   | .482   |
| 4 授業中、発表したことがまちがいであることに気づいた時  | .106            | -.361  | .213   | .436   |
| 17 先生にしまわれた時                  | .304            | -.364  | .184   | .434   |
| Contributions                 | 2.533           | 2.519  | 1.493  | 1.170  |
| Cont. Ratio(%)                | 12.663          | 12.594 | 7.464  | 5.851  |
| Cum. Cont.(%)                 | 12.663          | 25.257 | 32.721 | 38.571 |

因子構造について 第1因子に対して0.4以上の高い因子負荷量をもつ内容項目は、15.の友達が眼の前で内緒話を始めた時、25.仲の良い友達から仲間はずれにされた時、1.友達にからかわれたり、悪口を言われた時などの6項目であり、これらは主として友達との関係に関する因子 [Classmates] と考えることができよう。同様に、第2因子に高い負荷量をもつ項目は、29.の授業中、急に先生に指名された時、9.授業参観や研究授業の時、23.たくさんの人の前で発表する時などの6項目であり、授業中の発表に関する因子 [Presentation] と考えられよう。第3因子に高い負荷量をもつ項目は、26.のテストの前の時、14.先生がいきなりテストをやりますと言った時、7.テストをしていて、時間がなくなってきた時など4項目であり、いずれも学業成績に関係する因子 [Achievement] である。第4因子に高い負荷量をもつ項目は、2.の先生にウソをついてしまった時、3.学級の物をこわした時、先生が訳をよく聞いてくれなかった時、4.授業中、発表したことがまちがいであることに気づいた時など4項目であり、失敗に関係する因子 [Failure] である。

このことから、児童の学校での心理的ストレスは、まずもって友達との人間関係にきわめて大きく左右されがちなのが示唆されよう。また人前に出ることや能力差などにも敏感であることが推測される。

性差・学年差について 更に、心理的ストレス度の学年差および性差を分析するため、20項目のそれぞれについて、平均値をまとめたのが TABLE 3 である。各項目ごとに、性と学年の2要因分散分析を行ったところ、交互作用はいずれも有意ではなかった。学年に関する主効果は、20項目中14.の1項目のみ有意であった。このことは、心理的ストレスに関して、学年差はさほど大きな要因ではないことを示している。従ってこのデータは、3年生以下の心理的ストレスを推測するひとつの手がかりとなろう。

一方、性差に関してどの項目も、女子の方が男子よりも得点が高かった。性の主効果は、20項目中9項目に関して有意であり、特に因子分析結果の第3因子に関して顕著であった。このことから、女子は、全般的に心理的ストレス度が高く、特に学業成績に関しては、男子よりも大きな心理的ストレスを感じやすいことが示唆される。第1因子の友達関係において性差が認められなかった理由として、学年・性差にかかわりなく、どの児童も高い心理的ストレスを感じていることがあげられよう。

TABLE 3 Mean scores of each variable and results of ANOVA for grade and sex.

| Var. | 4th  | 5th  | 6th  | F     | Boys | Girls | F       |
|------|------|------|------|-------|------|-------|---------|
| 15   | 3.55 | 3.36 | 3.39 | 0.34  | 3.25 | 3.62  | 3.27    |
| 25   | 3.76 | 3.53 | 3.40 | 3.97  | 3.44 | 3.68  | 5.04*   |
| 1    | 3.68 | 3.49 | 3.36 | 1.19  | 3.41 | 3.61  | 1.25    |
| 20   | 3.31 | 3.37 | 3.24 | 0.15  | 3.24 | 3.37  | 0.47    |
| 31   | 3.58 | 3.35 | 3.25 | 2.65  | 3.34 | 3.45  | 0.84    |
| 28   | 3.63 | 3.31 | 3.35 | 2.17  | 3.25 | 3.61  | 6.96*   |
| 29   | 3.20 | 2.99 | 3.03 | 0.97  | 2.83 | 3.32  | 13.90** |
| 9    | 2.95 | 2.39 | 2.68 | 1.39  | 2.50 | 2.84  | 1.57    |
| 23   | 3.31 | 3.25 | 3.27 | 0.07  | 3.18 | 3.38  | 2.37    |
| 24   | 3.25 | 3.17 | 3.47 | 3.48  | 3.12 | 3.47  | 13.69** |
| 6    | 2.65 | 2.50 | 2.57 | 0.20  | 2.40 | 2.74  | 3.05    |
| 32   | 1.88 | 1.72 | 1.98 | 0.83  | 1.69 | 2.03  | 4.47    |
| 26   | 2.56 | 2.40 | 2.63 | 1.69  | 2.26 | 2.80  | 26.00** |
| 14   | 2.66 | 2.41 | 2.84 | 6.40* | 2.45 | 2.82  | 14.99** |
| 7    | 2.55 | 2.70 | 2.53 | 0.89  | 2.35 | 2.83  | 17.70** |
| 19   | 2.85 | 2.90 | 2.99 | 0.42  | 2.75 | 3.07  | 6.68*   |
| 2    | 3.62 | 3.36 | 3.54 | 3.89  | 3.43 | 3.58  | 3.91    |
| 3    | 3.20 | 3.21 | 3.11 | 0.13  | 3.12 | 3.23  | 0.35    |
| 4    | 3.18 | 2.93 | 3.08 | 1.61  | 2.82 | 3.31  | 17.71** |
| 17   | 3.37 | 2.98 | 3.42 | 1.78  | 3.04 | 3.47  | 4.35    |

Note : Higher scores indicate higher psychological stress.

\*\*  $p < .01$       \*  $p < .05$

このように友達関係に関して、心理的ストレス度が極めて高いということが、本研究での特徴的な結果のひとつである。

## 討 論

総務庁(1988)によると、昭和62年度間にいじめが発生した小学校は4497校で、全小学校の18.2%の学校で発生したと報告されている。これに示されるような人間関係の難しさが本研究においても示唆された。すなわち、第1因子の友達関係 [Classmates] は、言うまでもなく対人関係である。その他、第2因子の授業中の発表 [Presentation]、第3因子の学業成績 [Achievement]、第4因子の失敗 [Failure] ともその根底に対人関係が関与しがちである。例えば、学校生活における具体的場面においては、学業成績が悪いのを、友達にあざけられた。あるいは、上手に発表できないのを教師に鋭く指摘された等である。このように、対人関係が児童の心理的ストレスの主要な要因であることが、本研究結果から推測される。

この研究結果は、Phillips(1978)の述べているような学校ストレスにおける2つのカテゴリー；学業成績[Achievement]によるストレスおよび社会的[Social]ストレスとほぼ同一であると言える。ちなみに、第1因子の友達関係は、Phillipsの言う社会的ストレスとみなすことができよう。同様に、第2因子の授業中の発表、第3因子の学業成績、第4因子の失敗は、Phillipsの学業成績によるストレスとみることができよう。

さて、アメリカの初等中等教育においては、学力低下や規律の乱れが指摘されているが(文部省, 1989), Phillipsが述べている学校ストレスは、このアメリカの教育的風土を反映したものと思われる。一方、本研究で抽出された因子も、わが国の教育的風土(文部省, 1989)としてのいじめや受験競争とも関連していると考えられる。しかしながら例えばアメリカでは、友達関係よりも、対教師関係や学校の権威に対する葛藤がより深刻な問題として報告(Forman & O'Malley, 1984; Elias, Gara, & Ubriaco, 1985)されている。従って、本研究で見出された友達関係が最も大きなストレスの要因であるという結果とは、同じ心理的ストレスでも質的に異なっていると言える。

次に、本研究で大きな差の認められた性差について分析する。樋口・鎌原・大塚(1983)は、女子の場合、良い成績をとるなどの社会的承認の得やすい協調的行動の比重が高いことを指摘している。このような観点から分析すると、女子の特に学業成績における心理的ストレスの高さを説明することができるとと思われる。

このような児童の心理的ストレスの要因分析は、心理的ストレスの軽減あるいは除去(e.g. Forman & O'Malley, 1984)のためにも、今後更に、明確にしていく必要があると思われる。Lazarus(1984)が述べるように、心理的ストレスを予測する客観的方法はない。それゆえ、このような主観的ストレス尺度を構成し分析することによって、教師にとっても、新たな児童理解あるいは個別指導の展開が可能になるとと思われる。

## 引用文献

- 安藤延男(編) 1985 学校社会のストレス 垣内出版  
 Elias, M.J., Gara, M., & Ubriaco, M. 1985 Sources of stress and support in children's transition to middle school; An empirical analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, **14**, 112-118.  
 Forman, S.G., & O'Malley, P.L. 1984 School stress and anxiety interventions. *School Psychology Review*, **13**, 162-170.  
 浜治世・三根浩 1980 テスト不安研究の展望 心理学評論, **23**, 295-319.  
 Harter, S. 1981 A new self-report scale of intrinsic versus extrinsic orientation in the classroom: Motivational and informational components. *Developmental Psychology*, **17**, 300-312.  
 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討 教育心理学研究, **31**, 18-27.  
 井上信子 1986 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究, **34**, 10-19.  
 Lazarus, R.S. 1984 Stress, Appraisal, and Coping. Springer Publishing Company.  
 Lorion, R.P., Cowen, E.L., & Caldwell, R.A. 1975 Normative and parametric analyses of school maladjustment. *American Journal of Community Psychology*, **3**, 291-301.  
 水越敏行(代表) 1980 小学校高学年における心身発達状況と学校教育への適応について 金沢大学教育工学研究, **6**, 1-93.  
 文部省 1989 我が国の文教施策 一社会の変化に対応する初等中等教育一 大蔵省印刷局  
 Phillips, B. 1978 School stress and anxiety. New York: Human Sciences Press.  
 総務庁 1988 青少年白書 一青少年問題の現状と対策一 総務庁青少年対策本部編, 大蔵省印刷局  
 (1990年4月9日受稿)